

剣道の国際普及に関する一考察

中井 憲治¹⁾

1) 仙台大学体育学部

学会等報告

剣道の国際普及に関する一考察

中井 憲治¹⁾

1) 仙台大学体育学部

Kenji Nakai : A study on the international dissemination of Kendo : Bulletin of Sendai University, 51 (2) : 65-79, March, 2020.

1) Sendai University Faculty of Sports Science

KEYWORD WKC, Nippon Budokan, FIK, AJKF, The Philosophy of Kendo

キーワード 世界剣道選手権大会, 日本武道館, 国際剣道連盟, 全日本剣道連盟, 剣道の理念

I 国際普及の経緯と国際化の危惧

海外の剣道史は、明治時代に遡る。国際普及には、移民（米国西海岸、ハワイ、ブラジル、カナダ等）中の愛好家による海外日系社会への普及、剣道家による日本統治下（台湾、朝鮮）の学校、警察等での普及¹⁾の二パターンがあり、当該地域では、敗戦後の厳しい時期も愛好者が道統を維持し、昭和30年代の大学剣道部訪米、米国・台湾使節団来日等を契機に、剣道（Kendo）が一層普及して先進地域が形成された。さらに昭和30年代後半から、西欧、豪州等の柔道・空手愛好者が、加齢による体力減退や剣道の「精神性」「武士道」に惹かれ剣道に転じる新たなパターンが増え、日本人海外駐在員や柔道教師らが指導するクラブ的活動を中心に剣道が普及した。第18回オリンピック東京大会に先立つ昭和37年、財団法人日本武道館が設立され、昭和39年、大会直前に竣工した「日本武道館」において、剣道は、五輪公開競技（武道デモン

ストレーション）に、弓道、相撲と共に参加し、世界的に認知された。

昭和45年の国際剣道連盟（以下「国際剣連」という。初代会長・木村篤太郎全剣連会長）創立、世界剣道選手権大会（以下「WKC」という）初開催等を経、国際普及が急進したが、昭和57年、創立三十周年を迎えた全日本剣道連盟（以下「全剣連」という）は、「国際剣連加盟国の中には、普及の便法、政府援助の期待等から五輪参加希望の気運があるが、剣道の精神性を重視し、競技本位に流れることを危ぶむ声も少なくない。五輪参加によるステーツ・アマ出現を安易な普及手段にするのであれば剣道の本質に関わる」とかねて国際化を危惧する²⁾。当該論点は、今も五輪参加の是非、商業主義や試合至上主義の弊害等と共に大きく重い。

本稿は、剣道の国際普及の現状と課題、当該普及の核心たる「剣道の本質」とは何か等について考察を試みる。最初に、剣道の普及主体から見る。

1* 戦前、大日本武徳会（本稿末尾＜補注＞参照）は、在留邦人や日系人への指導目的で、台湾、満州、朝鮮、青島、北米南加、南洋群島、ハワイ等各地に支部を設置し、海外に剣道を普及させた（長尾進「剣道の文化誌」月刊「武道」2019年12月号48頁）。

2* 全剣連『三十年史』（1982）93頁。

Ⅱ 剣道の普及主体

1 国際剣道連盟

国際剣道連盟(International Kendo Federation. 以下「FIK」という)は、各国を代表する国内唯一剣道統轄団体が加盟し、国際試合規則、段級位審査ガイドラインの制定、WKC開催等の事業を行う。1970年に17団体(国・地域。以下「国」という)が設立し(人格なき社団)、3年毎に総会(役員及び加盟国会長で構成する最高議決機関)とWKCを開催する。2018年の17(回)WKC時には59国、と加盟数が三倍強となった。FIKは、事務局を全剣連事務局に置き、公用語は日本語及び英語(技術用語は日本語のみ)である。

FIKでは、各加盟国のほか欧州剣道連盟が段位を付与し、相互に当該段位を認める。段位受審に必要な修業年限を満たした者は、当該国の剣道連盟会長の承認を条件に、他加盟国においても段位受審が可能である。ただし、称号の互換性はない。

欧州国から当該国の支援を得るため、国際競技団体連合(以下「GAISF」という。オリンピック種目の国際競技連盟《IF》、相撲、合気道等が加盟)加入を求める要請があり、日本国内に消極的意見があったものの、2006年、FIKは、GAISFに加盟した。結果的に、剣道が広く認知され、類似競技団体の国際展開を抑制する効果があったとされる。

FIKは、全剣連から模擬試合者の派遣を得、毎年、WKC審判のレベルアップのため、アジア、アメリカ、ヨーロッパの地域別に講習会を開催するほか、WKC審判員確定後は当該審判団を日本に集め講習会を開催する。各国の指導者や審判の育成は最大課題であり、将来は国際審判員制度の構築も検討されようか^{3*}。

2 全日本剣道連盟(全剣連)

全日本剣道連盟(All Japan Kendo Federation. 略称「AJKF」)は、剣道、居合道及び杖道(以

下「剣道等」という)を各統轄し、平成30年4月現在の有段者登録者は合計200万人、このうち剣道が189万人(27年比11万人増)を数え、全日本剣道演武大会(京都大会)、全日本剣道選手権大会、全日本東西対抗剣道大会等を主催する。全剣連では、歴代会長がFIK会長に就任し、事務局がFIKの事務処理し、FIK主催・審判講習会に講師や模擬試合者を派遣するほか、各国の要請に応じ剣道の大会、講習会、審査会等にも専門家を派遣。また、毎年、竹刀、剣道着、防具等を各国に寄贈するなど支援する。

1) 事業目的と国際普及

全剣連は、日本を代表し日本伝統文化に培われた剣道等を唯一統轄する団体で、広く剣道等の普及、「剣の理法の修練による人間形成の道である」との剣道理念の実践等を図り、もって、心身の健全な発達、豊かな人間性の涵養、人材育成並びに地域社会の健全な発達及び国際相互理解の促進に寄与することを目的とし(定款5条)、これを達成すべく日本全国及び日本国外において、剣道等の普及、剣道理念の実践、これを通じた人材育成等を行う団体又は個人に対する指導、助言、専門家派遣その他の支援及び育成強化、剣道等普及の大会、演武会等開催、称号及び段級位の審査及び授与、試合及び審判の技術の向上及び適正化並びに普及等の事業を行う(定款4条)。定款には、剣道理念の実践たる普及(国際普及を含む)等を事業目的とし、国際普及の対象は「日本の伝統文化に培われた剣道等」と明確に記されている。

2) 会長権限

全剣連理事のうち1人が代表理事で「会長」と称する(定款28条)。唯一代表理事たる会長は、全剣連を代表し、前記1)の業務を執行(定款30条)、称号及び段級位の授与、返上命令、剥奪・復活の権限を独占し(定款58条・59条)、実質的に、剣道等の宗家(家元)たる地位にある。

3* 全剣連「月刊剣窓」令和元年5月号29頁・平成31年2月号32頁・3月号28頁、全剣連設立六十周年記念出版『全剣連と剣道界 この十年の歩み』(全剣連、2013)96頁。

3) 全剣連の海外門戸開放事業

① 段位（六段から八段まで）称号（錬士と教士）審査

平成元年春の審査には、剣道等段位に60人が挑戦。称号は、加盟国間で互換性がないが、受審希望者が多いため、剣道等の錬士受審（論文。剣道は日本語又は英語、居合道・杖道は日本語のみ）と剣道のみ教士受審（筆記。日本語又は英語）を認めている。

② 全日本剣道演武大会

京都武徳殿での演武（資格は錬士六段以上）は希望者が多く、無称号でも六段以上に参加を認め、平成元年は剣道等で84人が参加した。

③ 外国人剣道指導者講習会

原則として3年に2回、日本で、指導・審判法、木刀による剣道基本技稽古法及び日本剣道形の講習、剣道関係文化講義、アンチ・ドーピング講習、全日本少年少女剣道錬成大会（日本武道館）見学等を実施。平成元年は、FIK未加盟国も含め50国・102人の応募者から三段以上を参加資格とし、48国・65人を選抜して実施した⁴。

Ⅲ 国際普及の現状と課題

剣道の国際普及の目標は、全剣連定款（以下「定款」という）から明らかなように、国内普及と同様、剣道理念の実践にある。国際普及には、以下のとおり様々な課題（その大部分が国内普及と同根）があり、剣道等を取り巻く厳しい環境に鑑みると、必ずしも樂觀できないが、当分の間は、剣道理念の実践との核心は維持できるやに思われる。

1 現状

加盟国の剣道人口は、把握が難しく国際剣連も公表していないが、日本200万人（年間増・3万人強）、韓国50万人、台湾2万人程度、中国が1万人を超える程度かと見られる（中国の増加が顕著で近く台湾を凌駕する見込み）。日本の剣道人口は、少子高齢化の影響、クラブ活動の多様化（野球、サッカー、柔道等）等もあって、往時の新規参入者数の大は期待できないものの、現時点では他国より格段に多い。少年や女子の増加、中学校での武道必修化等の好材料もあり、厳しい状況は続くものの、剣道人口という「量」の面での持続可能性は、当面期待できるやに思われる。

WKC主管国を見ると、日本（4回）、米・英・ブラジル・仏・韓国（各2回）、カナダ・台湾・伊国（各1回）。合計18回のWKCでは、日本が、13WKC男子団体準決勝で米国に敗れた（優勝韓国、準優勝米国、第三位日本・台湾）例を除き、団体個人完全優勝を続けているが、「韓国剣道との差が縮まっている」などと日本剣道の「質」を懸念する向きもある。しかし、剣道（取り分け試合）の特性、上位層の厚さ⁵からして「質」の低下を過度に喧伝するのはいかがか。近い将来、WKCでの他国優勝はあり得るだろうし、国際普及にとっても望ましい面もあるやに考えるが、剣道人口の大、特に女子⁶少年を含む各層の厚さと広がり、八段や範士の現在数等から見て、「質」の面でも日本優位は当面維持できると思う。むしろ、より大きな課題は、正しい普及が各地各層で持続的に可能かという点にある。社会全般の国際化、グローバル化傾向の中、五輪や商業主義化等に影響され、剣道の本質が外堀から変容しないか、そもそも国際普及の基盤たる国内普及

4* 全剣連「月刊剣窓」平成31年4月号23頁。我が国の指導者は、六段以上・称号保有者が一般的。WKC海外審判者の質は夙に指摘され、三段以上との講習参加資格からも海外の実情が窺われる。

5* 毎年の京都大会出場者（3日間）は（錬士以上）3000名、日本武道館の全国少年剣道大会（4日間）参加者合計1万人。平成6年発足の「社会体育指導者（地域スポーツ）剣道」認定者も1万人超。平成元年の全日本選手権では、2連覇中の選手が1回戦敗退、4回目の優勝を目指す選手が2回戦敗退、決勝を争った両選手が直前の18WKCでは選手出場を逸した等々。

6* 戦後は、女子の剣道参加が顕著である。女子大会が多く開催され、令和元年度、全剣連は、女子委員会を初めて設置した。

態勢、取り分け師匠の確保いかに、今、吟味しなければならない。この観点から、普及の諸課題を次に論じる。

2 課題

1) 剣道の国際化、商業主義化等

全剣連では、慣行として剣道「国際化」という用語を用いない（「海外普及」「国際普及」「国際対応」等を使用）。「国際化」には、海外条件に適応するよう国内の中味を改めるとの意味も含むが、海外に普及しやすいよう剣道の本筋を変えていくとの考え方はなく、当該考え方を持つべきでないとの方針であり、日本で育った文化として剣道を充実させる責任を果たし、独善に陥らず努力して真の剣道を確立し海外普及するのが基本的姿勢だ。GAISFは、IOCの有力団体でオリンピック種目も含むが、剣道のオリンピック参加と直接関係はない（全剣連武安義光最高顧問・第七代会長＝平成9年から16年）⁷⁾。剣道が普及する中、女性愛好家が増えて欣快。剣道は、我が国歴史の中で培われ、日本人の精神文化の上に成り立つ。礼をもって相手に接し、相手を敬い、全力で技を尽くす。師匠や先輩から多くの教えを受け、技だけでなく、心の在り方、修行が大切だ。「不動心」「恐懼疑惑」「心技体」は、道場だけでなく社会や仕事の中で生き続け、これが武道全般に通じ世界各地で武道愛好家が増加する所以か。我が国の精神文化が万国共通の文化、価値観となるか。剣道には、他スポーツとは違う密度の高い師弟関係がある。師匠の役割は重要で影響力が大。WKCは、加盟国・人数が増加し年々充実。各国で日本剣道を広め深める日本の先生方に感謝する。（自らの海外経験から）注意を要するのは「言葉」の役割。日本では建前と本音、社交辞令、言外の言、察しの文化等々はつき

り意思を「言葉」に表さない場合が多く・・・言葉によるトラブルがたくさんあった。米国では「言葉は言った人の意思を表す」と受け取られ、これに基づき行動や交流が始まる（張富士夫第八代《現》会長＝平成25年から現在。《前》日体協会会長）⁸⁾。

このような全剣連会長らの考えからして、現執行部の下では、オリンピック参加、剣道の国際化・商業主義化等の懸念が顕在化することないやに思われ、適正な国際普及方針は維持されよう（スポーツ団体ガバナンスコード対応は要検討）。そもそも剣道には、商業主義等に対する抵抗力がある。その所以を敷衍すれば、官公庁・学校等剣道の存在、見るスポーツではなく実践する武道との特質⁹⁾、全剣連の独自財務基盤（審査登録収入）・宗家制の存在、「3年かけても良き師匠を探す」伝統、人材育成面の地方実績、剣居一体、古武道淵源等の剣道史等のほか、剣道理念の存在が指摘できよう。

2) 国際普及と国内普及

国際普及の対象は、あくまで「日本の伝統に培われた剣道」であり、これを大前提とし、国内普及の土台の上に国際普及を行う。したがって、国際普及と国内普及の課題の中核は、同根で共通部分が多い。

ただ、国際普及の実施面（一種の多数国間外交）には種々の困難が伴うのは事実である。それが剣道理念に則り進展するなら幸甚だが、適正な国際普及には、彼我の国民性、社会、文化等の相違等があり、取り分け剣道理念の浸透に多くの課題がある。相手の国情や国民性等をよく理解しつつ慎重に行うべき事柄であろう。日本の指導者が海外に短期滞在してする指導の限界は夙に指摘されるが、適正な剣道情報発信力を含む我が国の各種資源に係る吟味不十分のまま身の丈に合わせぬ積極的普

7* 全剣連『五十年史』（2003年）54頁・全剣連「月刊剣窓」平成18年6月号437頁

8* 全剣連「月刊剣窓」平成29年1月号2頁・平成31年1月号2頁

9* 幕府瓦解後の士族らの困窮を救済すべく開催された撃剣興業は、一時の盛況が著名剣術家の警視庁採用等もあって下火となった。剣術が見世物化し、観衆に判定をわかりやすくすべく打突後見栄を切る等の弊害が指摘される（前掲「剣道の文化誌」月刊「武道」2019年5月号45頁）。

及策を拙速すれば、剣道が悪い意味で「国際化」し、伝統文化の貴重な核心を失いかねないやに危惧される。剣道に係る技術移転にとどまらず、剣道理念の良き伝達を含む剣道の「質」の維持と確保には、海外剣士に日本にお越し願ひ修練いただく方策に軸足を置くのが望ましいやに感じる¹⁰⁾。

国内普及の課題を踏まえつつ、国際普及のそれを敷衍すれば、以下のとおり。

① 良き師匠の育成確保

生涯剣道の各段階での道場教育では、良き師匠は3年かけても探せといわれるように、その中長期的な育成確保が不可欠だが、これが必ずしも奏功しない。中学校における武道必修化は、剣道普及に大きく資するが、そもそも中学教員で剣道をよく指導し得る人材が少ないなど、態勢上の弱点が顕在化する。これまで少年剣道は、一般道場や警察道場が尽力し成果をあげてきたが、中学剣道との連携が良くなく、地域の剣道人が協力を申し出ても受入れ態勢が不十分との指摘もある。

② 試合中心・勝利至上主義の弊害

少年剣道、学生剣道共に、標記弊害が、まことに顕著である。剣道教育、生涯教育の実現との観点から見ると、過大な試合日程で中学・高校段階で燃え尽き、二・三段程度のレベルで剣道から遠ざかる例が少なくない。中長期的には、指導者を生み出す剣道人の拡大再生産が脆弱化しかねない状況が危惧される¹¹⁾。

③ 限られた財務基盤と予算面での選択と集中

少子化傾向が進むにつれ、一般道場では、財務基盤が脆弱化する。称号段級位審査登録収入が得難いことから、全剣連の支援等が期待されるが、全剣連の収入も伸び悩み又は漸減傾向にある。WKC開催の都

度、企業や個人の寄附金を期待する向きがあるが、実績から見て寄附金をよく得られる見込みは少ない。剣道を質的に底支える剣居一体の実現、古武道の失伝回避等も考えると、予算面での選択と集中が求められ、増大傾向にある国際関連経費を合理化せざるを得ないやの見方もある。

④ 語学力も含む渉外交渉力の脆弱性

全剣連は、一部称号審査試験を英文で実施し、世界剣道選手権大会も4回主管等。これら事業の適正実施には、定款、会員規則、称号段位や試合審判規則等のほか、主要資料を正確な英訳で適時適切に提供する必要がある。その大前提として、翻訳可能な論理的明確性や整合性を備えた日本語正文の存在と適正な解釈が不可欠といえよう。今後も、特に英語による適時適正な情報発信の必要性は一層高まり、その影響も大きいだけに情報内容や用語等のより慎重な吟味が必要となる。当面は英語の問題だが、剣道等の知見を良く有する語学専門家(linguistic adviser)の確保等態勢整備が国際普及の前提条件である。

FIK等は、一種の多数国間民間外交の場で相当の渉外交渉力が求められる。FIK総会の議決は、加盟国の過半数による。理事国は、日本並びにアジア地域(13国から日本を除く2国)、アメリカ地域(11国から3国)及び欧州地域(35国から3国)から各互選する。理事は、日本から4人、その他理事国から各1人の理事合計12人。これに加え、理事会選出の会長1人、日本のほか、アジア・アメリカ・欧州各地域の推薦に基づく会長任命の副会長4人、会長任命の事務総長1人の合計18人の役員が、理事会を構成する。したがって、日本の役員は、会長、副会長、事務総長各1人、理事4人の合計7

10* 拙稿「剣道の理念に関する研究」日本大学法科大学院法務研究 12号 88頁

11* 日本では、昇段審査の前に付け焼き刃的に形を稽古する傾向が一部に見られるが、欧州等では、形を稽古し、基本稽古、互角稽古に移る道場が多いし、剣道を単なる競技ではなく、伝統ある武的文化ととらえ、そのような文化を学ぶことに価値を見いだす剣道人も多いとの指摘(前掲1*「剣道の文化誌」月刊「武道」2019年12月号53頁)は正鵠を射る。また、剣道と居合道を併せて修練する海外剣士が多いとも聞が、まことに味わい深く受け止めた。

人を占めるが、もとより理事会の過半数ではない。さらに現FIKは、法人格なき社團であり、ガバナンス面で比較的自由に制度設計できるが、将来は、一般法人法等に基づく法人化が避けられないやに予想される。欧州各国の剣道人口は日本より少数だが、加盟国数が増加しつつあり、欧州地域から理事割当の増要求もあった。将来、法人成りした後は、理事会での日本優位が失われ、多数派工作いかんでは日本が少数派となって、試合審判規則変更等で剣道の本質が変容する事態もなしとしない。

3) 剣道理念の実践に関する吟味・再確認の必要性

全剣連には、GAISF加盟に引き続きスポーツ仲裁自動応諾制度導入、公益法人化作業開始等の動きがある。これらは政策判断として、もとより採り得る有力な選択肢だが、組織の自律自律性確保との観点からは、今後、様々な制約を甘受せざるを得ないやの見方もあろう。そのような中、剣道の本質、普及の核心たる剣道理念の実践とは何か、今、改めて吟味し再確認する必要があると思考する。

Ⅳ 普及（国際普及を含む）の核心たる「剣道理念の実践」

占領下禁圧された剣道は、主権回復後「体育スポーツ」だと弁じ漸く復活したが、試合の勝敗に偏するなど、貴重な核心の毀損が危惧された^{12*}。昭和50年、石田和外全剣連第二代会長（元最高裁判所長官）は、最高規範たる「剣道の理念」を修行者の修練に係る規範たる「剣道修練の心構え（以下『修練心構え』^{13*}という）」と共に通達した。スポーツ宣言離脱の意義が大きいと武安第七代会長（元科学技術庁事務次官）は総括する。剣道理念は、日本武道協議会「武道の理念」等が敷衍^{14*}、武道の普遍的理念となる。平成19年、全剣連は、剣道理念の実践たる指導（剣道教育）指針として「剣道指導の心構え（以下『指導心構え』^{15*}という）」を追加した。

剣道指導は、師弟同行^{16*}を旨とし、師は弟子の指導と共に自らも修行する。教育基本法（平成18年）は、憲法に則り教育の基本を確立、その振興を図るべく学校・家庭・幼児期の教育、社会教育等の目的、理念等を定め、同法の「教育」は自己学習（修養）も含むため、直

12* 剣道理念制定の背景には、現代剣道史と交剣知愛の系譜が色濃く存在。本稿末尾＜補注＞参照。

13* 剣道修練の心構え「剣道を正しく真剣に学び、心身を錬磨して旺盛なる気力を養い、剣道の特性を通じて、礼節をとるとび信義を重んじ誠を尽して常に自己の修養に努め、以って国家社会を愛して広く人類の平和繁栄に寄与せんとするものである」

14* 日本武道協議会は昭和52年、全剣連、全日本柔道連盟、全日本弓道連盟、日本相撲連盟、全日本空手道連盟等現代武道団体の連絡融和を図り、武道を奨励してその精神を高揚し、もって健全な国民（特に青少年）の育成につとめ、遍く世界の平和と福祉に貢献することを目的とし発足した。武道は、武技による心身の鍛練を通じて人格を磨き識見を高め、有為の人材を育成することを目的とするとの「武道憲章」を62年に制定。その後、武道は、武士道の伝統に由来する我が国で体系化された武技の修練による心技一如の運動文化で、柔道、剣道、弓道、相撲、空手道等を修練して心技体を一体として鍛え、人格を磨き、道徳心を高め、礼節を尊重する態度を養う、国家、社会の平和と繁栄に寄与する人間形成の道であるとの「武道の理念」を平成20年制定した（日本武道館『五十年史』350・18・16頁《2015》）。

15* 剣道指導の心構え「（竹刀の本意）剣道の正しい伝承と発展のために、剣の理法に基づく竹刀の扱い方の指導に努める。（礼法）相手の人格を尊重し心豊かな人間の育成のために礼法を重んずる指導に努める。（生涯剣道）ともに剣道を学び、安全・健康に留意しつつ、生涯にわたる人間形成の道を見出す指導に努める」

16* 「師弟同行」とは、剣道の稽古において、禪の修行の如く師と弟子が志を同じくして修行することをいう。剣道修行の望ましい姿とされる（全剣連「剣道指導要領」《初版、2008》160頁）。

心是道場¹⁷たる剣道（道場）教育¹⁸を内包する。今や、剣道指導より剣道教育と表現すべきであろう。「剣道教育」とは、剣道修行（師弟同行）による自己修養（学習）及び人材育成（普及を含む）をいう。剣道理念を解釈する。

1 剣の理法の修錬

「剣」とは日本刀¹⁹、「剣の理法」とは日本刀に係る理法（理合と操法）をいう。剣道理念の中核²⁰は、剣の理法である。理法は、気剣体一致の有効打突²¹を主な内容とし、剣道修錬（稽古、修行、修業ともいう²²）に係る精神的要素を含む²³。「修錬」とは、稽古を積み重ねて心身や

技を磨き鍛えることをいう。修行に於いては是迄、成就といふ事なし²⁴とされるが如く、道には終わりが無い。

全剣連定款は、称号の種別を範士、教士及び錬士と定め、称号段位を通じ範士を最高位とすると明定し（58条・59条）、他方、最高段位いかんを含む段位については、具体的に規定せず下位規範たる規則に委ねた。剣道規範体系から称号の段位に対する優越性は明白である。段位は剣道の技術的力量（精神的要素を含む）を示し、称号は剣道の技術的力量に加える指導力や識見等²⁵を備えた剣道人としての完成度を示す。当該完成度が最高位の範士では人間形成の成果た

17* 直心是道場、素直な心で修行すれば、天地到るところ道場であり、修行の場所ならざるはない。小川忠太郎「剣と禅」人間禅叢書第8編・改訂版2頁（人間禅教団出版部、改訂第一版、2008）は、幼少年らに「試合は剣道の奨励法で、最後の目的ではない。一生修行をつづけ、竹刀を刀と考え使って立派な人になる」「直心是道場、形のある道場だけでなく、生まれたときの正直な心、素直な心が道場。これをなくさず育てる」と語りかける。

18* 土田國保（元全剣連監事・警視総監・防衛大学校長）は、死線を越えた実体験から「すべては理屈ではなく実践にある。剣道理念を高々に掲げ堂々と実践。人間形成の道たる剣道道場教育をいかに具体的に正しく普及していくべきか、真剣な姿勢と取組にほかならない」と遺す（「剣窓スペシャル」《全剣連、2003》46頁）。

19* 「日本刀」とは、伝統的方法で製作された刀剣をいう（銃砲刀剣類登録規則4条2項参照）。「刀」は、銃砲刀剣類所持等取締法が規定する「刀剣類」に内包され（同法2条2項1号）、社会通念上「刀」の類型に当てはまる形態及び実質を備えた物をいう。居合道の試合で使用する「刀」は真剣とされ（居合道試合審判規則3条）、日本刀は鍛錬したもので充分品位を備えたものとされる（同細則2条）。「刀」「剣」「真剣」は、すべて日本刀を意味する（拙稿「剣道及び居合道で用いる「刀」に関する法規制等」仙台大学紀要43巻2号《2012》135頁）。刀と剣の歴史的異同につき、亙理章三郎「刀及剣道と日本魂」（大日本雄弁会講談社、1943）等。

20* 小川忠太郎講演録「剣道の理念・剣道と人間形成」9頁（日本武道館・全国高等学校体育連盟剣道部・東京都高等学校体育連盟剣道部、初版、1985）は「剣道理念で研究すべきは理法、私がポイントだと述べ、湯野委員も賛同した。理法を浅く解釈すれば説明等不要だが、指導者は深く解釈してほしい」と記す。

21* 「有効打突」とは、充実した氣勢、適正な姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものをいう（試合審判規則12条）。「刃筋正しく」とは、竹刀の打突方向と刃部の向きが同一方向である場合をいう（同細則10条）。

22* 「稽古」とは、古（いにしえ）を稽（かんが）え、先達の教えにつき工夫し、研究することをいう。歴史的には、鍛錬との訓練の意味合いや修行との修養の意味合いがある（剣道指導要領148頁）。「修行」とは、心身を厳しく鍛え磨くことをいう。「武者修行」との用例がある（全剣連『剣道と英辞典』《平成23年、二版》）。「修業」とは、業（わざ・技）を習い修めることをいい、修養の意味合いの「修行」より技術訓練の意味合いが強い。称号又は段位受審資格（称号段位規則11条・17条、同細則10条、同実施要領）で用いる「修業年限」とは、剣道技術の上達をめざして稽古に励んできた年数をいう（前同『剣道と英辞典』）。

23* 前掲「剣道の理念に関する研究」76頁

24* 「葉隠」聞言1-138。

25* 「指導力」とは剣道教育に係る指導能力、「識見」とは剣道に係る物事を正しく見分ける能力を各いう。称号審査では、日本剣道形、審判法、指導法等の知識、実技能力認定等に基づく地方代表団体会長の推薦が必要とされるなど、

る「人格」の徳操高潔を必要的付与基準とするなど、称号と剣道理念との親和性は極めて高い。

称号・段級位審査規則は、剣道理念を敷衍し、その解釈を示す。剣道修行の評価（受審時）については、段位審査で技倆（主な技倆判定要素たる有効打突修錬度が剣の理法を構成）を判定し、初段から八段までを付与し(15条)、当該技倆判定を前提とし、更に剣道修行を重ねた者につき、称号審査で剣理、識見等（範士審査は「人格」も対象）を備えた剣道人としての完成度、剣の理法を含む修行の総合的成果を判定して称号を付与する（10・11条）。

2 人間形成の道

「形成」とは、かたちづくることをいう（人格形成）。剣道は「人間形成の道」すなわち自己修養と人材育成の道であり、生ある限り「道」に成就なく、生涯剣道^{26*}が論理的な帰結である。修行によって技倆のみならず、識見や人格の涵養も期する剣道は、修行者の生涯つづき、その評価は棺を覆いて定まる。

武士道に淵源し、師弟同行しつつ礼を重んじ、生涯にわたって剣の理法修錬による人間形成の道を求めること等が剣道の特性である。敷衍すれば、剣道の特性を活かした教育によって、丹田（腹式）呼吸、平常心のほか、剣の五徳^{27*}、

武の七徳^{28*}など武士道や武道訓^{29*}に由来する徳性（死生観等）の涵養、これと身体的効果がいま社会対応性、決断・判断力の育成、接遇する相手の尊重、更には法令遵守、社会的責任等の自覚、日本の伝統と文化に培われ国際社会に対応し得る個性（identity）、情報発信力の涵養等を通じた効果が期待できるといえよう。

現代剣道揺籃期、刀の操作技術でなく修養を旨とする山岡鉄舟の撃剣理念は、門下生らによって教育論に展開した。剣道理念は、試合剣術の制約を願う鉄舟の理念に由来する。刀の操法に試合剣術のそれを含む矛盾があるとし、競技化傾向が進む現状との乖離を埋めるためには、全人教育、生涯教育等の一環として形の修錬、気剣体一致など剣道の特性を踏まえた継承発展が必要だ、との提言もある^{30*}。

「武士の子たる余に相応しきは自尊と独立」とされたが如く^{31*}、修行者の総体実力を基盤とする独立自尊なくして自ら道を求めることは^{32*}困難であろう。自立は自律に通じ自ら高めるとともに、他者も自立・自律の求道者と認めて尊敬する。他者への敬意と自らの修行は表裏一体との分析は、示唆に富む^{33*}。

技倆を問う段位審査に比べ、学科重視の方向性などがある。

26* けふはきのふの我にかけ(宮本武蔵「五輪書」水之巻)等、修行は日々、生涯かけて進歩向上を目指して行くと考え方が、生涯剣道の原点だと指摘がある（前掲1*「剣道の文化誌」月刊「武道」2018年6月号39頁等）。

27* 「剣の五徳」とは、正義、廉恥、勇武、礼節及び謙譲をいう。

28* 暴ヲ禁ジ兵ヲ止メ大ヲ保チ功ヲ定メ民ヲ安ンジ衆ヲ和セシメ財ヲ豊ニスル（春秋左氏伝）

29* 「虚言をいうことはなりませぬ」「卑怯なふるまいをしてはなりませぬ」「弱いものをいじめてはなりませぬ」等ならぬことはならぬとの会津武士道「什の掟」（石光真人編著「ある明治人の記録」《中央公論社・中公新書、初版、1971》、中村彰彦訳・解説「武士道の教科書・日新館童子訓」《PHP研究所、初版、2006》等参照）には、剣道教育と親和する面が多い。

30* 全剣連『剣道の歴史』《2003》35頁（杉江正敏）参照。

31* 内村鑑三「代表的日本人」独語訳版「後記」。福沢諭吉「学問のすすめ」は、独立とは自分にて自分の身を支配し、他に依りすがら心なきをいう、とする。

32* 安岡正篤「ますらをの道」83頁（株式会社ディ・シー・エス、初版、2003）は、禪にあって「道」に入るには、思索的方法と実践的方法（体験を深めていく行入）があると指摘する。

33* 日本武道館「日本の武道」41頁（日本武道館、初版、2007）[管野]、管野覚明「武士道に学ぶ」170頁（日本武道館、初版、2006）等。

3 剣道理念が目指す人間像

指導心構え策定の発端につき、剣道の社会的有用性を十分説明できず、生涯剣道の体系的稽古法、指導法等も提示しがたく、混乱が生じるとされた以上、適正な普及を実現するためにも、剣道理念が目指す人間像をより明確・具体化することが求められる。

剣道規範体系では、修錬心構えや指導心構え等の外、称号段位を通じ「範士」を最高位とし（定款58条3項）、その付与基準を剣理に通曉、成熟し、識見卓越、かつ、人格徳操高潔なる者^{34*}と規定しており（称号・段級位審査規則10条3号）、これが目指す剣士像といえるが、剣道理念が目指す人間像は、より普遍性を有し、生涯剣道を実践して世のため人のために尽瘁する剣士の生き様や死に様も含む。そこで、さらに現行法に当該人間像を求めると、近代憲法は自然権思想に基づく自由の基礎法で、人権規定は根本規範、これを支える核心たる個人の尊厳の原理は、剣道が目指す人間像の必須要素といわねばならない。教育基本法は^{35*}、教育の目的及び理念の要素として、人格の完成、心身共に健康な国民、個人の尊厳と公共の精神の尊重、豊かな人間性と創造性を備えた人間、伝統の継承と新しい文化の創造、正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力、伝統と文化の尊重、生涯教育、教育の機会均等等を掲げる。したがって、

剣道理念の目標は、個人の尊厳を重んじ、真理と正義を希求し、公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の形成であろう。当該人間像の具現化に際しては、剣道人一人ひとりが、修錬心構えと指導心構えの関係の明確化、剣道理念の解釈の深化を期し、先達の事績や師の教示に学び、日々修錬する実践に依拠するところが大なることもとよりである。

なお、張・日本体育協会会長(当時)は、スポーツ(剣道を含む)指導者に対し「スポーツは互いにルールを守り、絶対に暴力に頼らないという相互尊敬の下に存在し得る。他者を尊重する思いやりこそスポーツの命。暴力は徹底的に排除されなければならない。今回明るみに出た体罰は、極く一部の例外だと信じるが、それでも決して許さない^{36*}。今の自分があるのは剣道の師のお陰で一生の師だ。指導目的は、技能向上だけでなく、人格の向上・涵養が大切。指導者は、指導を通じ相手の人生をより豊かなものとし、時には人生に大きな影響を与えることに深謝しつつ指導していただきたい」と、個人の尊厳の原理を基調とする訴えを行った^{37*}。健全な組織や社会の維持発展は、畢竟「人」であって「人間形成」いかに依拠する。師弟同行、自ら修錬し他者に対する礼にはじまり礼におわる剣道教育にあって、伝統的諸徳目に加え、現代法の核心たる「人格不可侵」「個人の尊厳」を

34* 人格要件の審査には自ずと限界があるが、範士はもとより称号不受有の高位者であっても、当該審査後の非行等に人格面の重大な瑕疵が認定された場合、剣道の精義と奥義(称号段位規則15条6号から8号まで)に練達、熟達等せず、又は剣道理念の実践に瑕疵ありとして、綱紀処分の対象とし得るなど、少なくとも最低準則として十分機能すると思われる(後掲36*参照)。

35* 憲法で教育のあり方の基本を定めることに代え、我が国の教育及び教育制度全体を通じる基本理念と基本原理を宣明することを目的に制定され、教育の根本的改革を目的として制定された諸立法の中で中心的地位を占める法律・一般に関係法令の解釈及び運用については法律自体に別段の規定がない限り、できるだけ教育基本法の規定及び同法の趣旨、目的に沿うように考慮が払わなければならない(最大判昭和51年5月21日・刑集30巻5号615頁)。

36* 全剣連個人会員は、定款規則に違反する行為、全剣連の名誉を傷つけ又はその目的に反する行為等(刑罰法令に違反する行為を含む。以下「個人違反行為」という)をしてはならない(綱紀委員会規則4条1項)。個人違反行為に係る綱紀処分として、全剣連会長による称号段位の停止、返上又は剥奪等の処分が規定されている(同条2項)。刑罰法令違反等の重大悪質な個人違反行為については、称号・段位受有者のみならず、無称号・段位受有者に対しても段位剥奪等の厳正な綱紀処分が可能である。悪質な個人違反行為禁止と当該規定遵守は、剣道理念の最低準則といえよう。

37* 全剣連「剣窓」平成25年4月号3頁。

よく機能させたい。関係諸賢が剣道理念を実践して、法令遵守等に配慮し社会の範たるべきことは論を俟たない。

4 剣道教育（小括）

剣道教育は、剣道理念の実践そのものである。社会教育、学校教育、家庭教育等の一環たる道場教育、直心是道場たる剣道教育は、人格の完成（人間形成）を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身共に健康な人材の育成を期して実施する。

剣の理法とは、日本刀に係る理法をいう。専ら竹刀で修錬するも竹刀を日本刀と観念し、師弟同行、生涯にわたり互いに正しい礼法を遵守し、健康と安全に留意しつつ日々真剣なる修行を積み重ね、もって生涯剣道を実践する。師は、弟子と共に修行し、謙虚な姿勢を堅持、自範しつつ弟子の年齢、体力及び技倆の度合によく適う剣道教育を心がけ、弟子は、師弟同行、剣道理念を実践する師の真剣なる生き様と死に様から学ぶ。初心の間はともかく、長年修錬する師にあっては、竹刀や木刀のほか、日本伝統文化の所産たる日本刀を用いるなど^{38*}、修行の更なる深化を期すことも^{39*}併せて望まれる。

剣道理念が目指す人間像は、個人の尊厳を重んじ、真理と正義を希求し、公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間であろう。斯道普及に際し、称号段位、優勝試合等は効果的で重要な役割を果たすが、あくまで剣道理念実践の一手法、生涯剣道の一過程に過ぎず、剣道の特性を通じ剣道理念の人間像を目指す自己修養と人材育成こそ剣道教育の貴重な核心たることを拳々服膺すべきと考える。日本の伝統文化に培われ、生涯学習の一翼よく担う等の特性

に思いを致し、剣道を正しく伝承しその発展を図り、剣道理念を実践し、より高き剣道を目指していかなければならない^{40*}。

V 結語（管見）

剣道理念は、試合の勝利でも称号段位の昇進でもなく、個人の尊厳を重んじ真理と正義を希求し公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間を形成する自己修養と人材育成（斯道普及）を目的とする。剣の理法の修錬は、剣道理念の人間像を目指す有用な手法であり、道場教育において、遍く各剣士がよく剣道理念を実践することが期待される。

剣道理念を通達した石田は、剣道の要諦につき「生くべくして生き、死すべくして死す。まことに死生一如、生くべきときには死力を尽くし、死すべきときには従容として帰するが如くに逝く。かかる生死の判断と覚悟、日本武道の神髄は畢竟そこに存する。その要諦は、湧き来る執着、妄念を能く払拭して住するなく著するなく、留らず滞らず、換言すれば無心、無我、応じて蔵せざること明鏡の如き境地に到達することであろうか」と遺し、試合の勝敗や称号段位の昇進につき「優勝試合や段位制度等は剣道の奨励発展に役立つが、苟も自己の完成を目指し真に剣道修行を志す者は徒らに低迷すべきでない。剣の道は全身全魂、自己の総てを投入し脇目もふらず敵に立ち向かうところに本質があり、己の誠を尽くし一生懸命、我を忘れ、唯一途に困難に立ち向かうところに貴さがある。技はどこまでも技に過ぎず、終局の目標になつてはならない。我を忘れ捨身で立ち向かうことは、やがて無念無想、無我、無心・・無に通じ、

38* 居合道と剣道の人口比率は、日本で数%だが、欧州では、30%を超える（全剣連「剣窓」令和元年12月号23頁）。将来、これが彼我の剣道の質にどのような影響を与えるか、注視したい。

39* 戦国時代、初太刀に続き切先を返す往復切り（燕返しの如く上下又は左右が一对）で仕留める刀法が主だったが、1543年の鉄砲伝来後に刀法が確立。人間形成をも目的としつつ、自らの身を捨て初太刀を機を見る心に置き換え、もって究極の一刀（一刀流「切落」、新陰流「十字勝」等）が成立した（大保木輝雄「いまの剣道」月刊剣窓平成30年2月号20頁）。日本刀を用いる居合道の形は、抜きつけと切り下ろしを基本とする。剣居一体の修行が求められる所以のひとつであろう。

40* 拙稿「剣道の理念と剣道指導の心構えに関する法的解釈」日本大学法科大学院法務研究13号130頁

心を錬磨する契機がそこに在る。剣によって修得した素質を活用して臨機応変、活殺自在、世のため人のために働き、いささかでも天地の化育に参ずることができれば、剣の功德も亦大である」と断じた。

山岡鉄舟の逝去が澆季に絶無の大往生と崇敬される如く^{41*}、人の一生にあって生き様も大事だが、人間形成を結実させ、これを了する死に様こそ大事か^{42*}。聖人は死に安んじ、賢人は死を分とし、常人は死を畏る^{43*}、命もいらず名もいらず、官位も金もいらぬ人は仕末に困るもの也^{44*}等の遺訓もある。

優勝試合や称号段位等は、剣の理法の修錬を慫慂する手法又は生涯剣道の途中過程の一つにすぎず、剣道理念の最終目標とはなり得ない。剣道の特性は、日本刀の理法の修錬にあり、生涯剣道等とあいまち死生論の追究につながると愚考する。日々の生き様にあって、一灯照隅しつつ斯道に尽瘁、微力ながらも真剣に、人間形成の道を能う限り悔いなく歩む。他方、何人も避けられない「死」に際し、自らの生き様を回顧し、せめてこの辺りで満足するかという程度に心残りなき死に様こそ、我々凡者が安んじて旅立つ道の選択肢か^{45*}。今を生きる者にとって「死」は未知の領域に属する。迷いつつも道を志す者として、見苦しくない最後を、と願うがその保証なき故、日ごろの生き様を正し、感謝と共に一生を了するよう祈りつつ過ごすほかないか、との先達の言辞もある^{46*}。明日の死を意識するとき、今日を真剣に生きるが最善、いかに生くべきかは、いつ死するともよろしき工夫、更に徹底すればいかに死すべきかとの工

夫^{47*}となろうか。生涯剣道を実践し、真剣な生き様を願って心身を錬磨し、我を忘れ捨身で立ち向かって無に通じるべく日々研鑽、世のため人のため微力ながらも尽くせば、心残り少なき死に様も得られ、これが剣道の功德か。初中級まで段位昇進や試合勝利を励みとするは結構だが、生涯剣道を実践する生き様の最終的段階までに、何人にも不可避な生死の問題を直視しつつ、剣道理念の掲げる道を歩み得れば、幸いこれに尽きるものがあるだろう。

剣道は、武家社会の成熟とともに武術から武道へと昇華、剣道修行を通じ人格形成に資する貴重な核心を継承してきた。心法、刀法及び身(体)法を高齡まで追究し得る特性を有し、生涯学習社会にまこと相応しい。その周辺諸情勢は、日本社会の国際化、急激な少子高齢化等の中、複雑に変化するが、剣道理念や生涯剣道を標榜して更なる隆昌を期するには、南洲翁が「何程制度方法を論ずるとも其人に非ざれば行はれ難し。人有りて後方法の行わるるものなれば人は第一の寶にして己れ基人に成るの心懸け肝要なり。道は天地自然の道なるゆゑ講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ」と遺すが如く^{48*}、剣道教育、各剣士の自己修養と人材拡大再生産が要諦となろう。

良き人間形成を剣道教育の目標としても、心身鍛錬に資する有益性は一般スポーツとも共通する故、学校教育、社会教育、家庭教育等で、今、剣道が有用である由縁は何かにつき大方の納得を得ていく必要がある。しかして剣道(道場)教育が別して有用とすれば、歴史と文化に培われた多様な特性と先達の貴重な実績に依拠するところが

41* 円山牧田「全生庵記録抜萃」(全生庵、1918)。

42* 武士の学ぶそのおしへはおしなべて其の究は死のひとつなり(塚原ト伝)。戦国武士の最大の課題は、死の覚悟であった(大保木輝雄「いまの剣道」全剣連「月刊剣窓」平成30年2月号20頁)。

43* 佐藤一斎「言志録」132条。

44* 西郷南洲「遺訓」30条。

45* 森信三「修身教授録」255頁(致知出版社、1989)等。

46* 渡邊五郎三郎『西郷南洲手抄言志録を読む』(致知出版社、2011)。

47* 安岡正篤『東洋倫理概論』416頁(致知出版社、2000)。安岡は、関西剣道大会で優勝、日本農士学校の試合で自ら審判、晩年も毎朝、真剣で素振りをつづけた(前掲32*「ますらをの道」283頁(林繁之)解説)。

48* 渡邊五郎三郎『南洲翁遺訓の人間学』(致知出版社、2005)。

大きい。剣道は、日本刀の理法の修錬による人間形成。日本刀の理法修錬によるべき剣道を、安易に竹刀の理法修錬によるものに変容させることは、剣道の貴重な核心を喪失させかねない。長き生涯剣道の間には、日本伝統文化の所産たる日本刀の意義を改めて実感したい⁴⁹⁾。何人にも不可避な生死の問題にいかに向き合うか、明日の死をも思い、一灯照隅し今日を真剣に生きることに剣道修行が資するか、剣道教育をもって良き人材を拡大再生産し得るか、武道の現代的意義いかなの説明責任は、師弟同行し日々研鑽する各剣士に課せられ、生涯を通じ試行錯誤すべき課題。困難な問題の解は、現代武道史の中にあり、真剣に試行錯誤する剣道教育の現場で見いだし得よう。

国際社会で主張し得る日本民族の良き個性(identity)の確保と更なる剣道普及との微妙な均衡を内蔵する剣道理念に深く思いを致し、当該実践に際し温故知新、維持すべきものは確と維持するも、改めるべき点あればこれを改める謙虚さと更なる修行が求められる、と記して擲筆する。

＜補注＞ 現代剣道（略）史と剣道の理念

（拙稿「剣道の理念に関する研究」日本大学法科大学院法務研究12号60頁から65頁、全剣連『剣道の歴史』《2003》236頁から248頁、長尾進「剣道の文化誌」月刊武道2018年1月号から2019年12月号）

1 現代剣道の誕生

草薙剣等、日本では、古から「剣」を神聖視してきた。

鎌倉時代に作刀技術が進歩し、室町時代以降、武士は、戦で直面する生死の観念から脱すべく「武士の魂」たる日本刀で修錬した。武術は、生死の場を想定し真剣に対峙する形稽古によることから厳粛な「礼」を要求する。江戸時代、技（事）の修錬を通じ心（理）をいかに解放するかを主眼とするようになり（沢庵『不動智神妙録』《タチバナ教養文庫、平成23年》、『兵法家伝書』《岩波文庫、1985》、佚斎樗山『天狗芸術論・猫之妙術』《講談社学術文庫、2014》、笹森順造『一刀流極意』《体育とスポーツ出版社、平成25年》等）、修養化又は教育修行的傾向をより強め「道」たる精神文化性を深めた。また、従前の形稽古を補完する竹刀打込み稽古（撃剣）が工夫され（新陰流考案の袋竹刀は、17世紀に流派を超え普及した。防具たる面小手胴垂の四点を揃えたのが18世紀の直新陰流、次いで中西派一刀流が改善し普及した）、これが現代剣道の嚆矢である。

2 明治維新後の衰退と復活

「剣術」は、維新後衰退したが（榊原健吉ら撃剣興業に功罪あり）、西南の役における警視庁抜刀隊の大功で再評価され、明治10年代に警察武術たる地位を得た。当時、日本刀使用の凶悪事犯等が多発、警察では、日本刀操法修錬の需要度が高かった。明治19年、警視庁は、警官の統一的訓練に資すべく警視流の形（立居合・

49* 前掲 10*「剣道の理念に関する研究」65・69・74・86 頁、日本武道学会剣道専門分科会「剣道を知る辞典」（東京堂出版、初版、2011）195 頁[大保木輝雄]、近藤典彦「羽賀準一」（同時代社、2015）330 頁「剣道入門階梯」、矢野博志「刀法について思う」東京剣連だより 79 号 1 頁（東京都剣道連盟、2015）等。

木太刀)及び級位制を設けて流派制の解消を試みた。明治10年以降、慶應義塾、一高、帝大、学習院等が相つぎ撃剣部を創立。明治44年「剣道」は中学校・師範学校の正課となる。日本資本主義の父・渋沢栄一が北辰一刀流道場で塾生生活、教育家・福沢諭吉が居合の免許皆伝者であるなど、各界各層の指導者には剣術の素養のある者が多かった。

現代剣道揺籃期、鉄舟・山岡鉄太郎高歩は剣と禅を修行し、勝負を争うのではなく事理(技と心)を一致させるべく「心の外に刀無き」修養の剣を唱え、明治13年一刀正伝無刀流を開いた。刀の操作技術でなく修養を旨とする鉄舟の撃剣理念を承継した籠手田安定(知事)、香川善治郎(同流第二代宗家)ら門下生は、明治後半、教育的展開に尽力、撃剣理念に影響を与えた。大正2年文部省訓令1号・学校体操教授要目は、「剣道及柔道ハ其ノ主眼トスル所身心ノ鍛錬ニ在リト雖モ特ニ精神的訓練ニ重キヲ置クベシ。技術ノ末ニ奔リ勝敗ヲ争フヲ目的トスルカ如キ弊ヲ避クルヲ要ス」と明定した。

3 戦前の隆盛と敗戦

明治28年創設の武道統轄団体「大日本武徳会」は、武徳祭大演武大会(京都大会。現・全日本剣道演武大会)を創始した。小松宮彰仁親王を総裁に推戴して明治32年平安神宮に武徳殿(同演武大会場)を竣工、武術教員養成所(後に武道専門学校)を設立し会員数も100万人を超え、大正元年、大日本帝国剣道形(現・日本剣道形)を制定した。

武徳殿建設に際しては、酒造家・小西新右衛門、武道専門学校開設に際し三菱会社副社長・岩崎小彌太が多額の寄附をするなど、実業界も支援した。岩崎は、明治29年一高に入学し撃剣部(中山博道師範)で活躍、ケンブリッジ大学卒業後、明治45年神田駿河台の三菱副社長邸に道場を開設。これが三菱武道会(初代剣道師範は持田盛二範士十段。元警視庁・一高・学習院・慶應義塾等師範)の嚆矢である。

剣道は、昭和15年、皇紀2600年を寿ぎ天覧武道大会、宮崎神宮剣道大会(現・全日本東西対抗剣道大会)が開催されるなど、戦前の最盛期

を迎え、武道の中核を占めたが、国民戦力増進策に組み入れられ、昭和17年、大日本武徳会も政府外郭団体(首相が会長就任)に改組、敗戦を迎えた。

4 GHQ占領下の禁圧と復活

連合国最高司令官総本部(GHQ)は、昭和20年、占領開始後、教育面を筆頭に軍事基盤の破壊、無力化を企て、武道、特に剣道を厳しく禁圧。大日本武徳会を解散、剣道部会長木村篤太郎(後に全剣連初代会長)を含む多数を公職追放した。しかし、剣道人は、厳しい禁圧期を耐え、占領終結を予期して私的稽古会を多数結成、それらが主権回復と前後して各地の剣道連盟に収斂し、昭和27年、全国組織たる全剣連(任意団体)に大同した。

全剣連は、学校・社会体育としての剣道再起を期し、文部省(当時)と折衝、日本体育協会(現・日本スポーツ協会)にも加盟申請したが難航した。前者では、剣道のスポーツ一種目たる性格を明らかにし、全剣連をスポーツ団体に改組し民主的に運営すること等が復活条件とされ、後者では、剣道専門家が相当数を占める全剣連の理事構成、体育スポーツ・撓競技を標榜する全日本撓競技連盟(会長笹森順造・小野派一刀流神夢想林崎流宗家。元国務大臣、全日本学生剣道連盟初代会長、全剣連最高顧問)との関係等が問題視された。撓競技は剣道界に大きく影響、全剣連(昭和47年法人化)は、「剣道は体育スポーツの一種」だと各界を説得してこれが奏功し、学校社会教育等として再び復活、女子や少年の剣道も新たに興隆し今日の隆盛を迎えた。

5 全剣連会長「交剣知愛」の系譜

(無検証)

一高撃剣部は、青山・塩谷時敏教授が学生有志と神田一橋の校庭(当時)ではじめた撃剣稽古を嚆矢とする。明治40年ころから塩谷は、試合勝敗に偏り自らを審判に誇示又は審判の声のみを待つ弊害を批判し、無検証(審判なき自己審判制)試合を提唱。塩谷から「正々堂々勝負を自ら潔く決する無検証は、武士精神に淵源

する。古武士をもって自ら任ずる撃剣部員はこれに剣の神髄を見いだすべき」との薫陶を受け、一高撃剣部は、無検証を根幹的伝統とした。さらに、剣の修練が単に技を磨くだけでなく心身鍛練と人格錬磨をめざすが故、段級にこだわらず目標ともすべきではないとして、一高撃剣部は大正8年、段級制度を廃止した。無検証と相まち己の在り方を厳しく追究する以上、当然の成行と撃剣部は総括する。

明治19年創設の東大撃剣部は、専ら一高撃剣部出身者が構成、塩谷の思想的影響下で無検証制を採用した。当時の学生は「志操高邁で見識が高く意気軒昂。剣道の教えを以て人格形成の精神的基調、猛練習を以て身体鍛練の法とした。技倆では専門大家の妙技を尊敬しその稽古を受けるが、精神品性行状では自ら高く持し、師範招聘の選定は学生委員にて決定し、大会仕合審判に付ては学生自身主体的良心の判断を堅持し、専門家を煩わさず学生仕合者自己審判制を採り、仕合は堂々と公明で立派な勝負をつけた。己れが心と体の隙をやられたと感じた時は綺麗に勝ちを相手に譲り、徒らに観客の顔色を見ながら打って引き上げ逃げ廻るような未練がましいことがなく、勝敗を超えて自主的で純真な学生らしい行動をとり、人格形成のよすがとした」と笹森順造が評価する。

(佐々木と石田)

石田和外は、大正9年一高入学と共に撃剣部(中山博道師範)に入部し先輩・佐々木保蔵(大正2年東大卒・弁護士)の薫陶を受け、先に矢野一郎(元第一生命相談役)・横田正俊(元最高裁長官)、後に井本臺吉(元検事総長・全剣連顧問)らを擁し一時代をきづいた。香川善治郎の高弟・西久保弘道(元警視総監・東京市長・武術専門学校長等)の子・西久保良行(元地裁所長等)との縁で千葉「弘道館」の稽古を復活させ、一高終焉後も矢野に懇請して第一生命・相悟道場で弥生会(後に弥生倶楽部)の稽古を継続して撃剣部道統を守った。石田は、撃剣部につき「全寮制で、入寮と共に日常生活は全く一変し昆虫の羽化を思わせた。校風は質実剛健、念ずるは天下国家。修養の道は文武両道。『自重の念』『廉恥の心』『親愛の情』『共同の風』

が強調され、寄宿寮は学生自治に委ねられ学業より寮生活の意義が大。撃剣部創立は全国学校に先駆け、塩谷先生が部長として献身され先生を中心に展開。大正6年ころから東大、学習院にも呼びかけ弥生会名下に全国武者修行を行った」と回想する。

旧制高校は、知識偏重ではなく「人間形成」に重きを置いた。後に剣道観形成の過程で一高以降の交剣知愛(剣を交えて愛しむを知る)の系譜、取り分け佐々木との師弟関係が決定的であった。石田は、佐々木について「明治34年一高に入学して寮生活に心酔、塩谷先生に心から傾倒し、無声堂の日常稽古など全活動の中心的存在となり『人間なんて云ふものは一ピリオドの黴にすぎない』と喝破し『剣の目標は己の死に場所を誤らぬこと』『何事も正しく筋を立てなければならぬ』『剣は思いやり。何事も相手の立場に立って考えよ。己の心を空しうしていつも謙虚であれ。己の欲を断て』『神武不殺。利を見て義を捨てず。君子二諾なし、志士一言を思う』等々、折に触れ後輩に語り、見栄や仕来りとか形の上の安住を極度に嫌い、物の本質に徹して真実一路の道に生きることを念願。剣は根岸信五郎の許可を受け、大学在学中結婚し、卒業後は弁護士として本所に居を構えた。大正6年夫人、翌年長男を失うに及んで住居を一高近く本郷に移し、若さと清さに溢れる撃剣部員の鍛錬丹誠に生き甲斐を感じた」と語った上、「私自身が故人(佐々木)に造られた。その影響にはそれほど大なものがある。殊に一生の大事たる臨終に当たり身を以て啓示された気迫から受けた感銘は深い」と追悼する。

石田は、塩谷に始まり佐々木が大成した撃剣部の伝統的考え方を「勝負を争う以上は勝つ。しかし小手先の技を弄して相手をごまかし、逃げながら竹刀の先をただ当てる等は禁物。どこまでも正々堂々充実した渾身の気迫をもって相手と対し、相手のひるむところ又は相手のしかけてくるその出鼻を真っ正面から正しく打ち込む。そのため相打ちとなるはやむを得ない。そのような心構えを捨ててまで勝とうと焦るのは許されず、卑怯なことをするくらいなら負けて

よい。その意味で勝負に拘ってはならず、かくてこそ剣の修行が心身の鍛練となる。一高撃剣は無検証精神を堅持、段位など励みのためには役に立とうが、それで己を飾り本質を見失うことになるれば有害。立身出世等も同様、人事を尽くして天命を待って結果自然となる」と総括する。剣道の目的は試合の勝利や段位の取得に在らずして心身の鍛練にこそ在る、との石田の剣道観こそ剣道理念の淵源にほかならない。

大正13年前後、一高撃剣部OBが東大剣道部を専有する時代が終焉する。無検証試合を主張する一高撃剣部（弥生会）は、大正15年、大島治喜太師範の辞職に続き「無検証精神も破壊され、残りしものは世上一般の優勝旗争奪試合にすぎない」として昭和2年、前年優勝した東大主催・全国高等専門学校剣道大会に不参加、爾後、佐々木や石田を中心に無検証精神を護持した。

石田は、最高裁事務総長就任後の昭和35年、一刀正伝無刀流第五代宗家を継承し、最高裁長官退官後の昭和49年、全剣連第二代会長に就任した。

（佐々木・石田と木村）

全剣連を創設した木村篤太郎（明治44年東大卒）が七高造士館を経て東大撃剣部（木下寿徳師範。助手格に中山博道）に入部した明治40年当時、先輩・佐々木は抜群の強さを示していた。木村の剣風は、決して強いとか器用とかでなく真向から唐竹割りに打ち込む気性そのものであった。木村は、佐々木につき「一高撃剣部の育ての親で実に立派な人物」と評価するも「私は東大で中山博道と山里忠篤に教えを受けた」とし、昭和6年庄子宗光（後に全剣連第四代会長）らが発足させ東大剣道部OBで構成する赤門剣友会と「佐々木は何ら関係ない。赤門剣友会は、私が関係して発足し毎年正月、私中心に70～80人くらい集まる」と断じ、一高弥生会（倶楽部）と赤門剣友会との間に一線を引く。石田「遺文抄」に登場する剣士は、塩谷、佐々木のほか根岸信五郎、中山博道、大島治喜太、西久保良行、横田正俊（元最高裁長官）、草鹿浅之介（元最高裁判事）、香川善治郎、草鹿龍之介

（元海軍中將・一刀正伝無刀流第四代宗家）、笹森順造、小野十生、小川忠太郎（後に全剣連相談役。元警視庁主席師範）、矢野一郎らであり、木村の名前はない。石田と東大撃剣部や赤門剣友会との関係は希薄。全剣連との関係も、最高裁長官を退官した石田に木村が次期会長就任を懇請した後に開始した。

木村は、帝国弁護士会理事長等を経て占領下の昭和21年検事総長に就任、現憲法発布に際し司法大臣として署名した。その後公職追放・解除されて法務総裁・法務大臣、保安庁長官・防衛庁長官を歴任した。大島功（元検事正）が撃剣部に入部した昭和7年以前から後輩をよく指導、共に剣と人生を語り世相を論じた。戦後、満州から引き上げ住む家なき大島は、木村司法大臣邸に起居し大臣車に同乗して通勤する。そのころ石田も招かれて司法省人事課長に就任、同26年木村の法務総裁就任に際し、大島（後に全剣連第五代会長）が秘書官に就任した。

木村は、翌27年、講話条約発効後、全剣連を設立して初代会長に就任しGHQ禁圧の剣道の復興に尽瘁する。武徳祭大演武大会を京都大会として復活、全日本都道府県対抗、全日本剣道選手権、全日本東西対抗の全剣連・三大会を発足させ、国体正式参加を果たし、国際剣連創設・初代会長就任後、世界剣道選手権大会（WKC）を初開催するなど海外普及にも尽くした。木村は、昭和49年会長退任後、石田・第二代会長から名誉会長に推挽され、後任の石田会長を補佐する専務理事には大島が就いた。占領中の剣道禁圧は、維新後の廃刀令等に匹敵する危機であったが、全国剣士一致して剣道を復活させた。この現代剣道史における枢機に、木村が剣道界を指導し石田という最高の後継者を確保し得たことは僥倖であり、明治から昭和の交剣知愛の系譜が結実したといえよう。

（2019年 11月29日受付）
（2020年 2月 3日受理）